

公共政策大学院の役割

村松 岐夫 (むらまつ・みちお)



公共政策系大学院が出来たことは極めて大きい意義をもっている。これまでのニュースレターから拝見すると、そのことは何より開講科目や数多くの新しいタイプの教育活動を見るだけでも分かることである。豪華な教授陣による講義科目やプロジェクトのなかで何と何を選択して自分の専門領域をつくっていくか、そして自己の職業を決めていくか。ここが院生にとって肝心なところである。世界の動きをキャッチし、講義内容を評価し決断するところである。

公共政策大学院が設置された背景には、現代の先進産業国家において高学歴者が多くなっているという事情があった。現代の社会と経済に管理者として従事する集団はプロフェッショナルであり、高等教育機関は、各領域でプロフェッショナルの知識と技術水準を向上させる責任がある。日本型組織のOJTでは対応できなくなっているということがある。グローバル化の時代には、企業間の競争が激しくなることは誰もが言うことであるが、こういう時代は同時に行政間競争の時代でもある。国際交渉は、18世紀のようなある意味で優雅な「外交」のイメージではなく、高い専門的知識を駆使して、規格やルールや裁決基準をめぐってしのぎを削るたたかいである。企業世界でも同じようなことが言える。現代は専門家の時代なのである。しかも、必要とされる知識はマルチ・ディシプリンである。

筆者には、こうした大所高所からの公共政策大学院のあり方に関する見解と同時に、公務員ウォッチャーとして、公共政策系の大学院から新しい時代の公務員が多数生まれて欲しいという期待がある。公共政策大学院の入学者は種々の専門を背景にしているであろうが、従来、公務員供給の大口だった法学部を例に取れば、法科大学院という存在が人材を惹き付け、公務員の道への関心をそらすに違いない。そして、一旦法律を深く学ぶと法律家になりたくなるに違いない。したがって、従来のように国家公務員は法律系からの採用が減少するに違いない。このように考えると、高いレベルの公務を維持して欲しいという立場からは、その人材供給面で公共政策大学院への期待が高くなるのである。

(学習院大学法学部教授・公共政策大学院運営諮問会議委員)

目次:

教員の研究紹介 【第10回】	2頁
大学院講義レポート 【第4回】	2頁
Letter to Future Students	3頁
修了生の進路と 公務員試験	4頁
みずほ証券寄附講座 始まる	4頁



教員の研究紹介（第10回） 松浦 正浩客員講師

小生と東大の馴れ初めは15年前。
当時はまだバブルの余韻がそこかし

こに残っていて、駒場のキャンパスにも何か楽観的な空気が漂っていました。当時は環境問題がなかったわけではないのですが、現在のように誰もが地球温暖化のことを（少しは）気にかけているような状況ではなく、実際には「シマ現象」なんていって燃費の比較的悪い、当時としては大きなサイズの自家用車がヒット商品でした。小生はそんな豪華な車など買えませんでした。中古のホンダ・アコードでザンオールスターズなど聴きながら都内や海辺をドライブしたものでした。

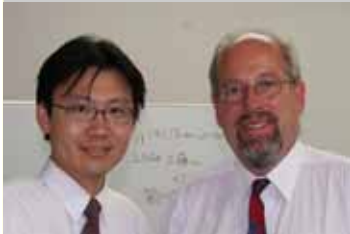
そうして実際に自動車を走らせてみると、実に走行環境が悪いことに気がつきました。環八や国道134号（湘南道路）はいつも渋滞しているし、幹線道路からちょっと外れると隘路ばかりで、歩行者や自転車が飛び出してきそうで怖い。「じゃあ、もっといい道路をどんどんつくる必要があるんじゃないか」と思って当時の土木工学科に進学しました。

しかし、道路のことについてよくよく考えてみると、道路は（レース場じゃないんですから）自動車のために存在するのではなく、むしろ「ひと」と「まち」が存在してはじめて道路の存在意義があることに気がつきました。つまりいろいろな「ひと」や「まち」にとっていい道路でなければ、建設しても意味がないということです。これは道路以外の社会資本、つまりダムにせよ、空港にせよ、都市再開発にしても同じこと。こうして、「ひと」や「まち」にとって、よりよい社会資本をつくる方法はないだろうか？とつねづね考えるようになりました。その結果が現在行なっている「交渉学」と「合意形成」の研究です。

自動車にとってよい道路がほしければ、とにかく早く、スムーズかつ安全に移動できるように計画すればよいでしょう。しかし「ひと」が満足できるよい道路をつくるためには、いろいろな「ひと」の意向を聴

いたり、話し合ってもらったりしなければなりません。トラックの運転手、週末だけドライブする人、車を持っていない人、歩行困難なご老人、土地を持っている人・・・道路にはいろいろな「ひと」が関係しています。このような多種多様な人に話し合ってもらって、彼らが納得できる結論を導き出す技術と、そのような話し合いの過程を分析するための方法論をあわせたものが「交渉学」です。そして「交渉学」を応用して、社会資本整備の計画や公共政策をみなが納得できるような形でつくること、これが小生の考える「合意形成」です。

交渉学と合意形成の方法論についてはマサチューセッツ工科大学（MIT）のローレンス・サスカインド教授の教えを請い、研究と実践に携わってきました。たとえば昨年まで、ある国道の交差点の事故を減らすために、いろいろな「ひと」に話し合ってもらうためのプロセスを設計し、実際に話し合っているようすを研究として観察してきました。また現在、寄附講座SEPPでは、地球環境問題の改善に資する技術を導入するために、どういふ「ひと」たちに、どういふことを話し合ってもらえば技術の導入が加速するのかを整理する研究を行なっています。また、冬学期には「交渉と合意」という講義でこれらの考え方について紹介しますので、ご興味をお持ちの院生のみなさんは是非受講してみてください。



MITのフェルグラー客員研究員（右）と

[大学院講義レポート：第4回]

<小西 敦教授（政策分析・立案の基礎）>

荏原 美恵（公共管理コース2年）



現在受講している「政策分析・立案の基礎」の講義について御紹介したいと思います。この講義を担当されている小西敦教授は総務省出身の実務家教員で、主に地方行政、行政管理、行政における評価を研究分野とされています。優しさと厳しさの程よいバランスで、私たち学生を実践的な学問の世界へ導いてくれる先生であり、また講義の延長線上にある課題や進路に関する相談にも親身にお答えくださる先生でもあります。

この講義は、国・地方の政策分析、立案を行う際に求められる基礎的知識・技能の一部を学ぶことを目標とし、具体的には国・地方の意思決定過程の概論、及び予算編成や法令制定、政策審議・検討プロセスについて学習します。また、理論と実践の両面から考察する能力を向上させるための工夫が講義の随所にあり、具体的には3つの特徴が挙げられます。

既存の枠にとらわれない広い視野で考える訓練の場：国と地方の政策プロセスを比較することで、その特徴、相違点、課題等を多角的に分析します。

政策過程に関する問題意識を自分の意見としてアウトプットする場：テーマに関連した大量の文献を読み込み、論点についてコメントします。

応用力を養う場：経済財政諮問会議、地方分権改革推進委員会など、国、地方で注目されている今の動きを追い、その課題と今後の展望について考えます。

自治体職員として経験を積んだ私にとって、文献を集中的に読み、時に立ち止まって分析、思考する時間を手に入れることが出来たのは、政策を総合的・多角的に思考する能力の形成に大いにプラスになっています。一方で、学生にとって、このような思考の訓練や基礎的知識の習得は、目まぐるしく変わる環境の変化に対応した政策を将来立案する際の一助になることでしょう。小西先生の講義は、現実に動いている“鮮度の高い政策”を扱っているため、制度と運用の乖離や、そこから生じる課題について具体的にイメージすることができます。問題意識を持ち、批判するだけでなく、その先にある対象（国民）を意識した創造的な解決策を導く能力を身に付け、実践することが、小西先生の考える講義の最終目標なのではと私は思います。

Letter to Future Students

コロンビア大学国際公共政策大学院 Judy Weng
(公共政策大学院初の受け入れ交換留学生)

I arrived in Tokyo in October 2006 as the first exchange student from the School of International and Public Affairs, Columbia University. Although the university curriculum of Todai is very different from that of Columbia, the quality of academic training and the enthusiasm of students are not unfamiliar. For example, I am taking the “Environment and Technology Policy 2” course which discusses about global warming and energy problems. Drawing on the three professors’ previous experience in various universities around the world, they perk up the interest of both local and foreign students who hope to gain a global perspective. Not only have I enjoyed the lectures at the University of Tokyo, but meeting new friends is also a key part of my exchange student experience. There are about 10 students in the class, and Japanese students account for half of the class. Many of them are interested in learning foreign languages, and their welcoming attitude towards foreign students has eased my anxiety when I first joined the class. Although I could not fully understand the content of the class discussion since it is conducted in Japanese, I consider it a good opportunity to practice my listening skills. Hopefully, I will be courageous enough to do the presentation in Japanese by the end of this semester.

Besides school work, I have had a great time sightseeing in Japan. I went to Kyoto for cherry blossom during the spring break. Until now, I could still recall the beautiful image of the falling flowers, when the wind blew as I walked underneath the sakura trees. In addition, since Kyoto is a city full of history, I was amazed by the number of family-owned shops selling traditional Kyoto-made arts and crafts. Having “kaiseki-style” Japanese food was another remarkable experience. Every dish looked so delicate, not to mention the finely-sliced ingredients and the well-matched colors for the spring. I am really glad that I experienced the “hanami”.

Why did I choose Japan? The answers became clear when I saw people bowing 90 degrees to each other, when I cheered for the champion of the sumo wrestlers and when I waited in line to have sushi at 7 a.m. in the famous Tsukiji Fish Market. Nothing tops the stimulating experience of cultural exchange.

私は、東京大学公共政策大学院が受け入れるコロンビア大学国際公共政策大学院からの交換留学生第一号として、2006年10月に東京に来ました。東大のカリキュラムはコロンビアのカリキュラムとずいぶん違いますが、教育の質と生徒の熱意は変わりません。私が取っている「事例研究（環境・技術政策2）」という授業では、地球温暖化とエネルギー問題を取り上げています。世界各地の大学で経験を積まれた先生方は、これまで培った知見を基に、グローバルな視点を身につけたいと思っている日本人の学生の興味と外国人学生の興味をかきたててくれます。授業が楽しいだけでなく、新しい友達に出会えたのも大きな収穫です。このクラスの受講者数は10人ほどですが、そのうち日本人学生は半分です。外国語を身につけたいと思っている学生が多く、彼らが外国人学生を温かく受け入れてくれたので、不安は最初の授業で軽くなりました。授業は日本語で進められるため、話の内容は完全にはわかりませんが、リスニング能力を鍛えるいい機会だととらえています。学期末には日本語で発表できれば、と思っています。

観光も楽しかったです。春休みの桜の時期に京都に行きました。今でも、桜の木の下を歩いていたときに、風が吹いて花が散る美しい光景をまざまざと思い出します。また、京都は歴史がある町で、数々の個人商店が昔ながらの京都ならではの美術品や小物を売っているのに驚きました。会席料理を頂いたのも素晴らしい体験でした。どの料理も繊細で、薄く切ってあったり、春らしい色合いだったりで見事でした。「花見」が体験できてほんとうによかったです。

体を直角に折り曲げてお辞儀しあっている姿を見たり、優勝力士に喝采を送ったり、有名な築地市場で寿司をつまもうと朝7時から並んだりといった体験ができたのも、日本を選んだからこそです。文化交流ほど刺激的な体験はないのです。



修了生の進路と公務員試験

東京大学公共政策大学院では、2006年度81名の修了者を送り出しました。修了生の進路は、既にホームページで公表しているように、新規の就職が62名、復職8名、他の大学院等への進学6名、その他が5名です。就職者のうち、国の各省が16名、金融関係16名、シンクタンク8名、メーカー5名、その他マスコミ、出版、商社等が1、2名ずつです。

公共政策大学院は、広く公共政策の形成、実施、評価に関する専門家の養成をめざす専門職大学院です。学生が就職先として希望している職種は多く、大学院側も学生諸君に身に付けた能力を広い分野で発揮してもらいたいと思っていますが、やはり公務員をめざす学生は多く、現実に国家公務員一種試験を受けて幹部国家公務員を志望する者が多数います。

しかし、昨今、公務員に対する批判が厳しいこともあり、公務員をめざす優秀な学生が減少する傾向がみられ、各方面から危惧されています。国や地方にとって、外交であれ内政であれ、公務が重要でやりがいのある仕事であることはまちがいありません。当大学院としては、公共のため、社会のために自分の能力を発揮したいと思っている学生諸君には、公務員をめざしてほしいと思っていますが、それを実現するためには本人と大学院の努力だけでは充分とはいえません。

社会の側に、公務の重要性を認め、そうした人材の能力を評価し、能力を引き出すための制度も必要であると思います。公共政策大学院は、法科大学院と異なり、学位が国家資格と直接リンクしていませんが、優秀な人材を集め育てるためには、その点でも何らかの制度の改善が期待されるところで、今年度から、自治体の中には、公共政策系大学院の修了者を念頭に置いた政策立案の専門職を設けたところも出てきましたが、それは公共政策系大学院の教育について社会的に評価され始めたということでしょう。今後、そうした傾向がさらに拡大することを期待しています。

(公共政策大学院院長 森田 朗)



みずほ証券寄附講座 始まる

今年度より5年間の予定で、みずほ証券株式会社による寄附講座「資本市場と公共政策」が始まりました。この講座は今後ますます重要性を増す資本市場のあり方について公共政策の観点から研究を行うと共に、それに關する高い能力をもった人材を育成することを目的としています。

冬学期から始まる授業に向けて現在準備が進められています。講座を担当するのは、西村あさひ法律事務所弁護士の小野傑氏(客員教授)、柳川範之本学経済学研究科准教授に加え、さらに近く金融庁から松尾直彦氏を常勤の客員教授としてお迎えする予定です。講座では実務界で活躍中の専門家も何人かスピーカーとしてお招きする予定で、学生にとっては金融の専門家による最新の話の聞き貴重な機会となるでしょう。

(公共政策大学院特任教員 奥原 純子)

編集後記 (No.10 - 01)

今回は公共政策大学院の受け入れ交換留学生第一号の東大・日本見聞録をご紹介します。楽しんで戴きましたでしょうか。
(編集担当)

〔編集・発行〕

東京大学公共政策大学院

*Graduate School of Public Policy
The University of Tokyo*

〒113-0033

東京都文京区本郷7-3-1

電話 03(5841)1324

FAX 03(5841)1313

E-mail: graspp@pp.u-tokyo.ac.jp

公共政策大学院ホームページURL
<http://www.pp.u-tokyo.ac.jp/>